
日本大学歯学部紀要

第 48 号 (2020)

日本大学歯学部



日大歯紀
ISSN 1348-818 X

目 次

§ 研究論文

実用的側面から考える-ing形の指導法

..... 松野 達 1

§ 紹介・解説その他

遠隔授業による体育実技

－日本大学歯学部 第1学年「生涯スポーツ」の取組み－

..... 佐藤紀子 鮫島千恵子 9

Contents

§ Original

A practical way of teaching the -ing form to elementary level English learners

Toru Matsuno..... 1

§ Miscellaneous

On-demand physical education practical skills class:

Measures taken in “Lifelong Sports” for first year students at Nihon University

School of Dentistry

Noriko Sato, Chieko Sameshima..... 9

実用的側面から考える *-ing* 形の指導法

松野 達

A practical way of teaching the *-ing* form to elementary level English learners

Toru Matsuno

Abstract

This paper focuses on better ways to teach English sentences, including the *-ing* form, to elementary level students. In Japan, the *-ing* form has been taught respectively as “gerund” or “present participle”. However, this teaching style confuses students. Therefore, this paper proposes to unify “gerund” and “present participle” and teach them as the *-ing* form. By doing so, students will easily understand the use of the *-ing* form.

Key words : 動名詞 現在分詞 *-ing* 形

はじめに

準動詞の学習において、動名詞と分詞、特に現在分詞は同じ *-ing* 形という形を持ちながら、それぞれ別の単元で教えられることが、日本の学校英文法において長年行われてきた。さらに、同じ形ゆえどちらの用法なのか英文の中で見分けられなければ、その学生は理解が足りないとされてきた。しかし、海外の英文法書、英文法学習書においては、すでに動名詞 (gerund)、現在分詞 (present participle) と分類せず、一様に *-ing* 形 (*-ing* form) としているものが多い。そこでこの稿では動名詞、現在分詞を含む例文を分析し、英語のやり直しをしている学習者または初めて英語を学ぶ人にとって分かりやすい指導の方法について考察を加えてみる。

1. 動名詞の指導法

学校英文法または学習英文法書において、動名詞は、不定詞、分詞と並んで、準動詞の一つに分類される。ここで指導の実例として、著者がある大学で英語の基礎固めをする学生のための共通教材として使用している久保野雅史監修『理解しやすい英文法 新訂版』(以下久保野2013)より、それぞれの用法の文例をあげることとする。

①主語・補語・目的語になる動名詞

主語として働く動名詞

(1) **Studying** math is important for all of us. (p.140)

主語

補語として働く動名詞

(2) Her job is **taking care of elderly people**. (p.140)

補語

目的語として働く動名詞

(3) I finished **reading the novel** yesterday. (p.140)

目的語

②前置詞の目的語, 完了形・受動態・否定形

(4) My father is really fond of **playing** golf. (前置詞の目的語) (p.141)

(5) He is proud of **having studied** hard every day. (動名詞の完了形) (p.141)

(6) Nobody likes **being criticized** by others. (動名詞の受動態) (p.141)

(7) He was ashamed of **not behaving** himself then. (動名詞の否定形) (p.141)

③動名詞の意味上の主語

(8) My parents don't like **my[me] going** out at night. (意味上の主語は代名詞) (p.142)

(太字, 斜字, 下線, 注釈語はいずれも (久保野2013) オリジナルのまま。
カッコの通し番号は筆者。以下同じ。)

高校の授業などにおいて, 動名詞は, 準動詞の一つとして不定詞, 分詞と共に隣り合った単元で行われるのが, 標準的である。主だった文法書においてもその並びはほぼ同じである。そして, 動名詞は, 同じく英文の中で, 主語, 補語, 他動詞の目的語として使える to 不定詞の名詞用法とその用法について比較対照される。

2. 分詞, 特に現在分詞の指導法

先に書いたように, 分詞の単元も準動詞の一部として指導される。分詞は動名詞と同じく -ing 形をとる現在分詞と, 過去分詞の用法について扱うが, ここでは特に現在分詞に注目する。

① be 動詞と共に使って進行形を作る。

(9) Please be quiet. **I'm studying**. (現在進行中の動作) (p.78)

②形容詞的用法の分詞

現在分詞 + 名詞の形

- (10) That **running** boy is my brother. (現在分詞：能動態) (p.155)

名詞 + 分詞 + 目的語・修飾語(句)の形

- (11) Do you know the boy **talking with our teacher**. (名詞 + 現在分詞) (p.156)

③補語になる分詞

S + V + 分詞 (C)

- (12) The girl came **smiling** to me. (p.157)

S V C

S + V + O + 分詞 (C)

- (13) He kept me **waiting** there for an hour. (p.158)

S V O C

④分詞構文

「時」(～するとき, ～しているとき)

- (14) **Walking toward the station**, I came across a friend of mine. (p.162)

「理由」(～なので)

- (15) **Living near a big supermarket**, we can do our shopping easily. (p.162)

「付帯状況」

- (16) The boys had a wonderful time, **playing** soccer. (p.162)

- (17) **(Being) Shocked at the news**, he couldn't say anything. (分詞構文の受動態) (p.163)

- (18) **Having lived here for five years**, he has many friends now. (分詞構文の完了形) (p.163)

3. 学習者用文法参考書での動名詞, 現在分詞の記述

上記で動名詞, 現在分詞の用例について見てきたが, 両者は「動詞の原形 + -ing」という形が共通なことから, どちらの用法なのかを判別するための説明が, 文法書ではなされてきた。ここでは, 両者の判別の仕方について学習文法書にいくつか当たってみたい。

まずは, 高校生もよく利用する, 綿貫陽・他『ロイヤル英文法』(2000) (以下綿貫2000) について見てみる。綿貫(2000)では, 「動名詞と現在分詞の相違点」と章立てして両者の違いについて説明しているが, その中で動名詞か現在分詞かの見分けについては, 「動名詞と現在分詞はどちら

も ~ing 形」なので、「名詞の前に置かれた場合には、動名詞が形容詞的に用いられているのか、現在分詞の形容詞用法なのか紛らわしいことがある」と述べている。

(1) 意味上の違い

①動名詞は修飾する名詞の目的や用途を表す。

a **sleeping** bag = a bag (used) *for* sleeping (寝袋 [シュラフ])

②現在分詞は修飾する名詞の動作・状態を表す。その名詞は現在分詞の表す動作・状態の意味上の主語である。

a **sleeping** lion = a lion *that is* sleeping (眠っているライオン)

(中略)

〈busy ~ing〉, 〈go ~ing〉は分詞か動名詞か?

〈busy ~ing〉は busy *in* ~ing の *in* が省略されたものとされる。そこで、この ~ing を動名詞とする見方もあるが、現在では実際には普通 *in* がないわけであるから、現在分詞と考えて良い。

My mother is busy *cooking* in the kitchen. (母は台所で料理に忙しい)

〈go ~ing〉ももとは go on ~ing であったとされるため、同じように扱われるが現在では 〈go ~ing〉の形で慣用的に用いられるので、現在分詞とされるのが普通である。

She went shopping. (彼女は買い物に行った) (綿貫2000, p.535)

江川泰一郎『英文法解説 改定三版』(1991) (以下江川1991) でも章立てして、現在分詞と動名詞について、紛らわしい例を紹介している。

B. 構文上紛らわしい例 無理に区別をする必要はない。しいて区別をするのなら、現実の前に前置詞があれば動名詞と見なし、なければ現在分詞と見なせばよい。

(1) She was busy *cleaning* the house.

(2) She spent her time *reading*.

(3) The chance was long (in) *coming*.

(4) I had a lot of trouble *getting* a job. (江川1991, p.361)

B. (1)~(4) について「発生的に見れば前置詞を伴う動名詞の構文であろう」が、現在に照らして「(前置詞がなければ) 現在分詞とみなすのがよいであろう。」としている。

二冊の英文法書に共通なのは、歴史的経緯を踏まえながら、もともと動名詞だった表現が前置詞の省略(脱落)によって、今では現在分詞とみなすのが妥当なこと、またその一方で、この境界線は大変曖昧であることを示している。英語をある程度こなす人間にとっては、こういった記述を読んでも、あまり動揺しないかもしれないが、英語を学び始めた人、学び直している人、苦手だと思っている人にとっては、どちらが正しいのだ、という気持ちになるかもしれない。実際、筆者はこれまで、学生への英文解説で例に似た英文について、動名詞と現在分詞の区分けをはっきり示すようにしてきた。それは、苦手な人にありがちな、正しい答えがきちんとないと不安になってしまうこ

とを避けるためでもあったことは否定できない。

4. 海外の英文法書、英語学習書の場合

学校英文法で英語を学んでいる高校生、大学生がどのように動名詞、現在分詞を学んでいるかを見てきたが、海外の英文法書では、動名詞、現在分詞をどのように扱っているかを参照する。まず、Quirk, Randolph *et al. A Comprehensive Grammar of the English Language* (1985) (以下 Quirk *et al.* 1985) より、当該部分を引用する。

Where no premodifier appears, genitive or otherwise, the traditional view held *painting* to be 'gerund', as in [15], where the item is in a structure functioning nominally (in this case as subject); but it was considered a participle if the same structure functioned adverbially, as in [16]:

(前置修飾語がない場合に、属格にせよそうでないにせよ、伝統的な見解では、[15] のように、*painting* は「動名詞」であると考えられていた。そこでは、その項目が名目上機能しているある構造の状態（この場合は主語として）にあるからである。しかし、[16] のように、同じ構造が副詞的に機能する場合は分詞と考えられていた。)

Painting a child is difficult. [15]

Painting a child that morning, I quite forgot the time. [16]

(中略)

For reasons that will now be plain, we do not find it useful to distinguish a *gerund* from *participle*, but terminologically class all the *-ing* items as PARTICIPLES. (中略) By avoiding the binary distinction of gerund and participle we seek to represent more satisfactorily the complexity of the different participial *expressions*. (略)

(いま明らかである理由から、私たちは「動名詞」と「分詞」を区別することは有用ではなく、用語的にはすべての *-ing* の項目を「分詞」として分類しています。(中略)「動名詞」と「分詞」の二元的な区別を避けることで、我々は様々な分詞表現の複雑さをより十分に表現しようとしている。)(Quirk *et al.* 1985, p.1292, Note[a], 訳は引用者による)

次に日本でもお馴染みの、Swan, Michael, *Practical English Usage* (4th ed.) (2016) (以下Swan 2016) より当該部分を引用する。

'participles' and 'gerunds': an unclear difference

The distinction between 'participles' and 'gerunds' is not always clear-cut, and it can sometimes be difficult to decide which term to use. For this reason, some grammarians prefer to avoid the terms 'participle' and 'gerund'. (中略)

In Practical English Usage the expression ‘*ing form*’ is used except when there is a good reason to use one of the other terms.

〔分詞〕と〔動名詞〕：違いははっきりしない

〔分詞〕と〔動名詞〕の違いが常に明白にわかるわけではなく、ときとしてどちらの用語を用いるべきか決めかねることがある。この理由から〔分詞〕と〔動名詞〕という用語を避ける文法家もいる。

(中略) 本書では、他の用語の一つを使うのに足る十分な理由がある場合を除いて、〔-ing形〕という表現を用いることとする。(Swan 2016, p.116, 訳は引用者による)

この二冊の英文法書に限らず、英語圏で作られる英文法演習テキストでも、両者を単に‘*ing form*’とし、動名詞、現在分詞の区別をしないものが多く見られる(例えば, Murphy, Raymond *et al.* (2009))。

5. 今後の動名詞、現在分詞の指導へ向けて

前項で見たように、英語を母国語とする国での英文法書や英文法学習書では、動名詞も現在分詞も同じく、-ing 形として扱うのに対し、日本の学校における英文法指導では、伝統文法に則り、動名詞、現在分詞の分類は変わらずに存在し、授業でどちらが英文で使われているかをきちんと分類しようと試みるところも、ずっと変わっていない。もちろん、これらが無駄だというつもりはないし、自らもそのプロセスで英語を学習し、現在はその形で指導も行っている身としては分類する良さも分かるつもりである。しかし、英語を使うために学ぶ人たちの方が圧倒的に多い中、動名詞と現在分詞の分類などは現実問題としてあまり重要ではないと言えるのもまた事実である。

そこで、どうしても分類が必要というのであれば、それに対して、日本の学校における英文法指導でも、動名詞と現在分詞を -ing 形として一つにまとめて指導するのが有効だと考える理由を以下のように挙げたい。第一に、形が同じである故に、用法に共通点が多いということがある。それは、英文(5)と(18)、(6)と(17)を見てもお分かりであろう。形式上全く同じなのに、こちらは動名詞で、こちらは現在分詞と分けることによって学習者の混乱が増すように感じられる。これを -ing 形の受動表現、完了表現とし、使える場面のバリエーションを示すだけにすれば、多少なりとも学習者の負担が減るであろう。

次に、同じく準動詞に分類される to 不定詞との用法比較が、-ing 形と分類することによって、よりしやすくなるというメリットがある。to 不定詞は、名詞用法、形容詞用法、副詞用法とすでに用法別に指導する方法が確立している。同じように、-ing 形として、名詞用法(動名詞)、形容詞用法(分詞修飾、補語として使う分詞)、副詞用法(分詞構文)として、ニュアンスの違いや表す意味の違いの指導を従来通り行うとすっきりすると思う。そのためには、分類についての再編が必要であるし、どう説明を盛り込むかについての検討も必要であるが、英語を母国語とする国でも行われているし、挑戦する価値は十分にあると思われる。

参考文献

- Huddleston, R. & Geoffrey, K. P. (2003). *The Cambridge Grammar of the English Language*. New York: Cambridge University Press.
- Murphy, R. & Smalzer, W. R. (2009). *Grammar In Use: Intermediate* (3rd ed.). New York: Cambridge University Press.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., & Svartvik, J. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London, UK: Longman.
- Swan, M. (2016). *Practical English Usage* (4th ed.). Oxford, UK: Oxford University Press.
- 石黒昭博（監）（2013）. 『総合英語 Forest 7th Edition』 桐原書店.
- 江川泰一郎（1991）. 『英文法解説』 金子書房.
- 久保野雅史（監）（2013）. 『理解しやすい英文法 新訂版』 文英堂.
- 鈴木希明（編）（2016）. 『総合英語 be』 いいずな書店.
- 谷光生（2011）. 「英文法における V-ing の位置」『宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第34号』 283-289.
- 吉田正俊（監）（1990）. 『理解しやすい英文法』 文英堂.
- 綿貫陽・他（2000）. 『ロイヤル英文法』（改訂新版）旺文社.

遠隔授業による体育実技
－日本大学歯学部 第1学年「生涯スポーツ」の取組み－

佐藤 紀子, 鮫島千恵子

On-demand physical education practical skills class:
Measures taken in “Lifelong Sports” for first year students
at Nihon University School of Dentistry

Noriko Sato, Chieko Sameshima

Abstract

To prevent the spread of COVID-19, all the classes in the first semester of 2020 at Nihon University School of Dentistry were taught as on-demand classes. However, “Lifelong Sports,” a practical skills class, which is offered in the first semester for first year students, did not take place since it involves practical sports and collaborative learning with other students. However, classes were devised such that students were afforded opportunities for physical exercise and communication among teachers and other students. At the conclusion of 15 lessons, 131 of 136 students responded to a class evaluation questionnaire. The results revealed that 75% of the students were satisfied with the course.

In this article, measures taken in the on-demand class “Lifelong Sports” during the coronavirus pandemic are examined. Advantages and disadvantages of the on-demand class are discussed.

Key words : 遠隔授業, 体育実技, on-demand class, physical education

1. はじめに

2020年1月, 日本で初めて新型コロナウイルス感染症患者が確認された。その後, 徐々に感染が拡大し, 4月に入ると国内の感染者数は2,430名, 死者は69名にのぼった(朝日新聞DIGITAL, 2020)。そのような中, 政府は4月7日に7都道府県に緊急事態宣言を発令し, 16日には対象地域が全都道府県へと拡大された。

日本大学歯学部では3月24日に臨時教授会を開催し, 授業やガイダンスを実施する上での感

染症拡大防止策が検討され, 学事日程が変更, 4月1日の授業開始が4月20日に延期となった。4月2日の教授会では遠隔授業の実施について検討がなされ, 4月8日の臨時教授会において, 講義, 実習・実験・実技, 演習, 全ての授業を遠隔(オンライン)で実施することが決定された。授業開始は5月11日と決まった。遠隔授業の実施決定後, 「生涯スポーツ」の目標や学習項目の検討, 内容の変更を短期間で実施することとなった。

第1学年前期に開講される体育実技, 「生涯

スポーツ」(健康科学Ⅰ)の一般目標は、運動・スポーツの重要性を認識し、生涯にわたり継続して実践する態度を身に付けること、他者とのスポーツ実施を通じてライフスキルを身に付けることである。体育・スポーツへの参加を通じてライフスキルが獲得できるという考え方が浸透しており(上野, 2011; 杉山, 2005), ライフスキルの中でも、特にコミュニケーションスキルが向上すると言われている(杉山, 2008)。従来の「生涯スポーツ」において、最も重要で特長な点は「協同学習」である。「協同学習とは、二人もしくはそれ以上の学生と一緒に活動し、公平に課題を分担し、意図した学習成果に向かって進むことである」(Barkleyら, 2014)。林ら(2012)は、体育実技の中に、協同学習方略を取り入れることで、受講生のコミュニケーションに関する自己効力感が高くなることを指摘している。遠隔授業という型式では、このような他者とのスポーツ実施、協同学

習の機会を持つことは叶わない。しかしながら、できる限り学生と教員、学生間のコミュニケーションがとれるよう工夫した。

15回の授業終了時におこなわれた授業評価アンケートには受講学生136名中、131名の学生が回答した。総合的な満足度に関する調査では、とても満足した学生は44名(33.6%), 満足した学生は56名(42.7%), どちらともいえないと回答した学生は21名(16%), 不満足・非常に不満足であった学生は10名(7.6%)であった。体育実技を遠隔授業としておこなうという初の試み、短期間で全ての学習項目、内容の変更を余儀なくされ、手探りの中での実施ではあったが、4分の3の学生が授業に満足する結果となった。

本稿では、コロナ禍における「生涯スポーツ」の遠隔授業での取組みについて紹介し、体育実技をオンラインで実施することの利点や課題について検討する。

表1 面接授業時の学習項目(スケジュール)

回	学習項目 グループ1	学習項目 グループ2
1	ガイダンス, ライフスキルチェック	
2	体力チェックテスト	
3	レクリエーションスポーツ(ドッジビー, バスケットボール)	
4	球技大会への参加	
5	アダプテッド・スポーツ①風船バレーボール	生涯スポーツへの導入①ウォーキング
6	アダプテッド・スポーツ②ソフトバレーボール	生涯スポーツへの導入②体づくり運動・体力チェックテストフィードバック
7	アダプテッド・スポーツ③バレーボール	生涯スポーツへの導入③卓球
8	アダプテッド・スポーツ④視覚制限体験, 視覚障害者スポーツ体験	生涯スポーツへの導入④ボウリング
9	アダプテッド・スポーツ⑤プレイヤーに適したスポーツ	生涯スポーツへの導入⑤ボウリング
10	生涯スポーツへの導入①ウォーキング	アダプテッド・スポーツ①風船バレーボール
11	生涯スポーツへの導入②体づくり運動・体力チェックテストフィードバック	アダプテッド・スポーツ②ソフトバレーボール
12	生涯スポーツへの導入③卓球	アダプテッド・スポーツ③バレーボール
13	生涯スポーツへの導入④ボウリング	アダプテッド・スポーツ④視覚制限体験, 視覚障害者スポーツ体験
14	生涯スポーツへの導入⑤ボウリング	アダプテッド・スポーツ⑤プレイヤーに適したスポーツ
15	まとめ, レポート作成, ライフスキルチェック	

2. 授業の形態・方法

1) 面接授業における形態・方法

従来の面接授業では、Aクラスの学生は火曜日、Bクラスの学生は水曜日に開講される「生涯スポーツ」を受講する。授業はAクラス、Bクラスをさらに2グループに分けて、1グループ40名弱で展開され、教員1名が各グループの授業を担当する。

表1にグループ別の学習項目を示した。学習項目は「生涯スポーツへの導入」と「アダプテッド・スポーツ」に大きく分かれている。「生涯スポーツへの導入」では、ウォーキングや卓球、ボウリングなど身近な運動・スポーツの方法を学び、生涯スポーツの選択肢を増やすことを目的としている。「アダプテッド・スポーツ」では、スポーツをする人の特性に用具やルールを適合させることで、多様なニーズのある人々がスポーツに参加できることを学ぶ。アダプテッド・スポーツの考え方を学ぶことで、自身が高齢になった際の運動・スポーツ継続のヒントを得ること、ひいては、共生社会の実現に寄与できる人間の育成も意図している。主な授業実施場所は、松戸歯科体育施設体育館、3号館地下3階道場、ボウリング場である。

2) 遠隔授業における形態・方法

2020年5月1日に文部科学省高等教育局大学振興課からの事務連絡「遠隔授業等の実施に係

る留意点及び実習等の授業の弾力的な取り扱い等について」(文部科学省高等教育局大学振興課, 2020)の中で、「遠隔授業等の実施に係る留意点」が示された。

- ・授業担当教員の各授業ごとの指導計画(シラバス等)の下に実施されていること
- ・授業担当教員が、オンライン上での出席管理や、確認的な課題の提出などにより、当該授業の実施状況を充分把握していること
- ・学生一人一人へ確実に情報を伝達する手段や、学生からの相談に速やかに応じる体制が確保されていること
- ・大学等として、どの授業科目が遠隔授業等で実施されているかなど、個々の授業の実施状況について把握していること

日本大学歯学部では、これらの点に留意し、遠隔授業が展開されることとなった。第1学年オンライン授業配信用のコンピュータは3号館3階第8講堂に設置された(図)。

授業はGoogle Meetのライブストリーミングを利用したオンデマンド型、一方向型の授業で、第1学年学生、約140名が火曜日13:00-14:50に開講される「生涯スポーツ」をリアルタイム(授業時間通り)で受講することとなった。配信済みの授業はGoogle Drive上に録画・保存され、学生はいつでも動画を視聴できる方



図 授業配信用コンピュータ

表2 遠隔授業時の学習項目 (スケジュール)

回	学習項目
1	ガイダンス, ライフスキルチェック
2	生涯スポーツへの導入①身体活動の強さ・量, 必要な身体活動量
3	生涯スポーツへの導入②ウォーキング1
4	生涯スポーツへの導入③ウォーキング2
5	生涯スポーツへの導入④ジョギング
6	生涯スポーツへの導入⑤ラジオ体操第1
7	生涯スポーツへの導入⑥ラジオ体操第2, みんなの体操
8	生涯スポーツへの導入⑦ストレッチ
9	生涯スポーツへの導入⑧ボウリング
10	アダプテッド・スポーツ①様々なバレーボール
11	アダプテッド・スポーツ②視覚制限体験, 視覚障害者のスポーツ
12	アダプテッド・スポーツ③視覚障害者スポーツの考案<レポート作成>
13	アダプテッド・スポーツ④障害の社会モデル, ICF
14	生涯スポーツへの導入⑨運動・スポーツの重要性<レポート作成> アダプテッド・スポーツ⑤アダプテッド・スポーツの利点<レポート作成>
15	まとめ, レポートフィードバック, ライフスキルチェック

式がとられた。Google Classroom を用い、学生への連絡、資料配布、課題提示および提出、フィードバック、質問の受付や回答等のやりとりをおこなった。毎回の出席確認については、Classroom 経由で Google Forms を用いておこなった。授業は専任教員1名、非常勤講師1名の2名が担当し、講義および毎回の提出物の評価、学生への対応等を分担した。表2は令和2年度の学習項目である。

3. 授業の目標

当初予定されていた「生涯スポーツ」の目標は、面接授業を想定した内容であった。授業型式が遠隔授業に変更となったため、目標を変更することとなった。以下に、面接授業での目標と遠隔授業での目標を示すとともに変更理由を記す。

1) 一般目標 (GIO)

- ・生涯にわたり運動・スポーツを継続して実践する態度を身につけるために、運動・スポーツの重要性を認識する。

⇒変更なし

- ・日常生活の中で生じる要求や遭遇する難問に対して効果的に対処できるようになるために、他者とのスポーツ実施を通じてライフスキルを身につける。

⇒日常生活の中で生ずる要求や遭遇する難問に対して効果的に対処できるようになるために、計画的な運動実施を通じてライフスキルを身に付ける。

変更理由：学生同士が一緒に身体を動かす機会がなくなり、個人での運動実施となったため文言の修正をおこなった。ライフスキルの中でも計画性や情報要約力といった個人的スキル（島本・石井，2006）を重視することとした。

2) 到達目標 (SBOs)

- ・自身の体力の現状を知り、今後どのような運動・スポーツを実施していくべきか、具体的に述べるができる。

⇒生涯にわたり、どのような運動・スポーツを実施していくべきか具体的に考えることができる。

変更理由：体力チェックテストの実施ができなため、自身の体力の現状を知るとい
う文言を除いた。

- ・様々な運動・スポーツの実践を通し、身体の動かし方・使い方を意識し、それを説明できる。

⇒基本的な運動の実践を通し、身体の動かし方・使い方を意識し、それを説明できる。
変更理由：様々なスポーツができなくなったため、遠隔授業で取り扱うウォーキングやラジオ体操等の基本的な運動に変更した。

- ・多様なニーズのある人々が楽しめるスポーツについて、具体的にルールや用具の工夫を説明できる。

⇒変更なし

- ・他者と協力し、ゲーム・試合やグループワークに参加できる。

⇒削除

変更理由：学生同士が一緒に身体を動かす機会がなくなったため目標を削除した。

- ・他者とスポーツを実施する中で、好ましい個人的・社会的態度をとることができる。

⇒毎回の課題を実施する中で、好ましい個人的・社会的態度をとることができる。

⇒追加：オンラインでのやり取りを通して、コミュニケーションをとることができる。

変更理由：主に教員と学生間のやり取りとなるが、メール等でのやり取りの中でコミュニケーションをとり、好ましい個人的・社会的態度の育成を目指した。

- ・自身、他者の安全確保に対し配慮することができる。

⇒変更なし

通常の面接授業で「他者」は他の学生、受講生となる。遠隔授業ではウォーキング等、外での活動があるため、周囲の人々、そして家族を想定した。

4. 実施内容

前述の5月1日付の文部科学省高等教育局大学振興課の事務連絡では、「実習等の授業の弾力的な取り扱い」についても示された。実習・実験・実技によりおこなわれる授業を遠隔授業により代替する場合には、面接授業に相当する教育効果を有することが求められた。体育実技の取扱いについては、「遠隔授業等によりレクチャーをおこない、実技は課題として課すとともに、実施状況をレポート等の提出等により報告」と、具体的な取組例が示された（文部科学省高等教育局大学振興課，2020）。

そこで「生涯スポーツ」においても、従来の面接授業に相当する教育効果を保てるよう、授業目標を達成できるよう、内容について検討し、実技を課題として課すこととした。特別な運動・スポーツではなく、どこでも誰でも気軽に始められる内容を選んだ。ここでは、各回の授業内容及び工夫・配慮点について紹介する。

第1回：ガイダンス

授業の目的、進め方、安全の確保等、授業概要の説明をおこなった。生涯にわたり体を動かすことの重要性、ライフスキルの概要を説明した。島本・石井（2006）が「社会的スキルを内包するライフスキルを多面的に測る」ことを目的として開発した尺度「日常生活スキル尺度（大学生版）」を用い、学生自身に前期授業開始段階でのライフスキル獲得状況を把握させた。

第2回：身体活動の強さ・量、必要な身体活動量（生涯スポーツへの導入①）

将来、生活習慣病等を発症するリスクを低減させるために、達成することが望ましいとされる身体活動基準、「健康づくりのための身体活動基準2013」（厚生労働省，2013）の内容を説明した。基準では、3メッツ（歩行程度）以上

の強度がある身体活動（生活活動・運動）を週に23メッツ・時、そのうち運動は週に4メッツ・時実施することが推奨されている。「身体活動のメッツ（METs）表」（国立健康・栄養研究所，2012）を示し、学生に自身の身体活動量を振り返り、基準と比較するよう求めた。

第3回：ウォーキング1（生涯スポーツへの導入②）

正しい立位姿勢，歩き方の基本，体幹を使った歩き方についての説明をおこなった。体力要素の中でも，有酸素性運動を実施することで向上する全身持久力が，健康関連体力として重要視されていることを説明した。30分のウォーキングを学生に課し，脈拍の変化，気分の変化について報告させた。

教員の目が届かない中，特に屋外での運動課題実施については，様々な点に配慮をする必要があった。特に感染予防および怪我等事故への対応について考慮した。

コロナウイルス感染症患者数が増加しつつあった4月10日，山中伸弥（2020）が自身のホームページ「山中伸弥による新型コロナウイルス情報発信」において，ウォーキング，ジョギング時に必要な社会的距離について，ヨーロッパの研究を紹介し，ウォーキングやジョギングは一人でおこなうことを推奨した。また，4月16日には，運動強度が高まることで，深く呼吸をすることは咳やくしゃみと同様の配慮が必要だとし，ジョギング時のマスク等の着用を勧めた。スポーツ庁（2020a）も，4月27日に安全に運動・スポーツをするポイントについて示し，屋外では人混みを避けて，一人でおこなうこと，可能な限りのマスク着用を求めた。このような状況下において，屋外での運動課題実施には不安があった。

しかしながら，5月1日に，山中はホームページ上で，マスク等の着用については多数のランナーや散歩をする人々が集中する場所を想

定しており，人が少ない場所での提案ではないと，補足説明をおこなった。マスクを着用したままの運動は，低酸素状態になりやすいことや熱中症の危険性が高まることを危惧する声が高まり（NHK，2020a），5月11日には，中国でマスク（医療用高性能マスク）を着用し体育の授業をうけた中学生が死亡したことが報道された（NHK，2020b）。こうした流れを受け，スポーツ庁（2020b）は5月22日に，安全に運動・スポーツをするポイントについて第2版を公表した。そこには，マスクを着用したままの運動・スポーツの危険性が示され，人との距離を確保することが強調された。

第3回授業は2020年5月26日に実施された。学生には5月22日に公表されたスポーツ庁の資料を提示し，ウォーキング実施時には人混みを避けるよう注意を与えた。マスクを着用したままの運動の危険性を伝え，適宜，マスクを外すことや無理をしないよう伝えた。マスク入手が困難な時期であったため，バンダナ等の代用を勧めた。ウォーキング課題実施については，学生の居住地が全国に分散していること，周囲の環境に違いがあることを考慮する必要があった。そのため，課題実施に適した天候，時間帯を自身で選べるよう，火曜日の授業時に課題を提示し，実施期間を翌週の日曜日までとした。

日本大学では，正課教育中に発生した傷害事故に対し，治療費等の給付金が支給される。給付申請については，担当教員が事故の状況を確認し報告する必要がある。この給付金は，担当教員が事故の状況を確認できない遠隔授業を想定したものではなかった。しかしながら，授業時の事故であることが証明できること，担当教員が詳細を説明できること，教員から学生への注意喚起や安全を考慮した運動課題の指示が適切になされている場合は給付の対象とされ得ることとなった。

そこで，ウォーキングの課題については，

ウォーキング実施前に必ず脈拍数を計測して Google Forms にて提出すること、ウォーキング終了後、整理運動、手洗い、着替えを済ませた後に可及的速やかに終了後の課題 (Forms) を提出することを学生に求めた。怪我等があった場合には、この終了後の課題の中に状況を報告するよう徹底した。これは、怪我等の事故が発生した場合、その日時が特定されることを期待した対応であった。

発熱等の体調不良の場合には、教員に必ず連絡をするよう学生に伝え、運動を必要としない課題に代替した。15回の授業を通し代替課題を課した学生は2名であった。

第4回：ウォーキング2 (生涯スポーツへの導入③)

正しい歩き方を実践するためのチェックポイント、運動を実施することによる気分の変化について説明をおこなった。チェックポイントを意識した30分のウォーキングを学生に課し、前回のウォーキングとの違いと脈拍の変化を報告させた。

第3回授業時と同様に安全確保のための注意喚起、ウォーキング実施前と実施後、それぞれ Forms にて課題を提出させた。

第5回：ジョギング (生涯スポーツへの導入④)

歩くことと走る事の違い、正しい走り方、BMI 計算方法を説明した。BMI を計算し BMI の高い者はジョギングを避けるよう伝えた。30分のジョギング (無理な場合はウォーキングでも可とした) を学生に課し、ウォーキングとジョギングの違い、脈拍の変化を報告させた。

第3回、第4回授業時と同様に安全確保のための注意喚起、ジョギング実施前と実施後、それぞれ Forms にて課題を提出させた。

屋外での運動課題実施となった3回の授業における怪我の報告は、1名よりあった。しかしながら、足首の違和感だけであり、その後、医

療機関で受診することはなかった。梅雨の時期や高温環境下での運動を避けるため、屋外で実施する課題を授業前半に配した。課題実施後に熱中症等を含め体調不良を訴える学生はいなかった。怪我等の事故が発生した場合の日時の把握を目的とした課題実施前後の Forms 提出は、学生にとってはやや煩雑だったようである。実施前と実施後の課題提出が同時刻であったり、実施後の課題提出が数時間後であったりする学生がみられた。

第6回：ラジオ体操1 (生涯スポーツへの導入⑤)

ラジオ体操の概要、歴史について説明した後に、授業時間内の課題として、各自 YouTube 上のラジオ体操第1 (NHK, 2020c) の動画を視聴しながら体操を実践させ、脈拍数を測定させた。その後、正しい動きの説明をした後、再度、課題として体操を実施させ、脈拍数の変化を実感させた (正しい動きで実施すると脈拍数は上昇する)。授業時間内の最後の課題として、ラジオ体操第1の13の動きの中から1つ運動を選び、資料として配布した骨格筋図を元に、主に使われる筋肉を考えさせた。

ラジオ体操中の怪我等の事故防止のため、運動スペースの確保を学生に求めた。学生のリアルタイムでの受講を前提としているため、授業内に指定された YouTube 上の動画を視聴させたり、Meet のライブストリーム視聴に戻らせたり、課題を提出させたりといった指示を与えた。

第7回：ラジオ体操2 (生涯スポーツへの導入⑥)

ラジオ体操第2の概要、正しい動きを説明し、1999年、国際高齢者年にちなんで考案された「みんなの体操」、座位でのラジオ体操 (かんぼ生命, 2020a) を紹介した。

一般家庭での実施を念頭に、老若男女問わず誰でもできることにポイントをおいて作られた

ラジオ体操第1に対し、ラジオ体操第2は職場向けに、青壮年層を対象に作られ、運動強度が第1よりも高いものとなっている（かんぼ生命, 2020b）。授業の最初にラジオ体操第1を実施させ、脈拍を測定させた。その後、ラジオ体操第2の正しい運動の方法を説明し、休憩を挟み、YouTubeで公開されているラジオ体操第2（NHK, 2020d）の動画を視聴しながら体操を実施、脈拍数を測定させた。全員が一つの課題に取り組んでいることを実感させるために、実際に第2の方が運動強度は高いのか「実験」と称し、脈拍数を報告させた。結果は第8回授業の際に伝えた。

第8回：ストレッチ（生涯スポーツへの導入⑦）

静的ストレッチ、動的ストレッチの特徴について説明し、授業時間内に13種類の動的ストレッチを実践した。

授業配信用コンピュータ設置の都合から、カメラの前で教員が模範の動きを見せることはできず、図と言葉のみでの説明となった。そのため、ストレッチの種類によっては学生にとって、実施が難しかったようである。実際の動きが示せるように、全身が映るようなカメラの設置や動画の作成等、工夫が必要であった。

第9回：ボウリング（生涯スポーツへの導入⑧）

ボウリングは年齢に関わらず楽しむことができ、技術的な差があってもハンディキャップ制を採用することで誰もが一緒に楽しめる生涯スポーツとして好適なスポーツである。また、ボウリングは国民の実施競技種目として上位にランキングされている（スポーツ庁, 2019）。ボウリングの歴史、マナー、ルール、点数の付け方、投球の基本的な技術を説明した。

2012年度からボウリングは、「生涯スポーツ」の学習課題として取り入れられている。しかしながら、2020年度は遠隔授業となったことで、

当初予定していたボウリング場の予約はキャンセルせざるを得なかった。

第10回：バレーボールの競技特性、様々なバレーボール（アダプテッド・スポーツ①）

バレーボールを通して「アダプテッド・スポーツ」の考え方を学ぶため、バレーボールの競技特性について説明した。その後、様々なバレーボール（バレーボール、ソフトバレーボール、風船バレーボール、シッティングバレーボール）の動画を視聴させた。動画は担当教員がYouTube上に公開されたものを事前に選び、URLを記載した資料を配布した。対象者によって工夫された用具、ルールについて考えさせた。

第11回：視覚制限体験、視覚障害者のスポーツ（アダプテッド・スポーツ②）

視覚に障害のある人のスポーツを考案する前提として、感覚について説明をした。その後、視覚以外の感覚を用いる方法について考えるため、視覚を制限し、ペットボトルからコップに水を注ぐという体験を各自で実施させた。視覚を制限して活動した場合に、視覚以外の聴覚、温度感覚や触覚といった皮膚感覚、位置感覚や運動感覚といった深部感覚等を通して得た情報によって、どのように環境を認知できたか考えるよう促した。その後、視覚に障害のある者がスポーツを実施するための具体的な工夫を知るために、担当教員自身がYouTube上に投稿した限定公開の動画を視聴させた。

この動画についても、第10回同様に、URLを学生に知らせ、授業時間内、ライブストリーム視聴の合間に見ることを求めた。学生からは、Meetでの動画の配信を希望する声があったが、音声設定が煩雑であったり、データ通信量の問題もあつたりするため、この方法をとった。

第12回：視覚に障害のある人のスポーツ考案 (アダプテッド・スポーツ③)

視覚に障害のある人の中でも、特に全盲の人が楽しめるスポーツの考案についてのレポートを課した。考案の際の留意点を説明し、資料の配布もおこなった。レポートの提出期限は翌週の日曜日とした。短期間でのレポート作成となるため、第11回の授業終了時にもレポートの概要を説明し、学生が準備をできるように働きかけをおこなった。

なお、全体に対するレポート課題の解説は第14回目の授業にて実施し、学生一人一人へのフィードバックコメントの返却および評価結果の開示は、第15回の最終授業前までにClassroomを通じておこなった。また、評価に対する質問にも速やかに応じた。

第13回：障害の個人モデル・社会モデル、国際生活機能分類 (ICF) (アダプテッド・スポーツ④)

学生はアダプテッド・スポーツを学ぶことで、必然的に「障害」について考えることになる。従来の面接授業では、取り扱うことができなかった障害の個人モデルと社会モデルについて、演習課題を用いて説明をおこなった。また国際生活機能分類 (ICF) について、アダプテッド・スポーツを用いて解説した。

学生には、授業受講前に「障害」とは何かを考えさせ、授業後に再度「障害」とは何か問かけ、自身の考え方の変化についてふりかえる課題を課した。

第14回：まとめ (生涯スポーツへの導入)⑨、 アダプテッド・スポーツ⑤)

授業のまとめとして、学生の授業内容の理解度をみるために、2つのレポート課題を課した。「生涯スポーツへの導入」の内容を振り返り、自身の身体活動量を把握した上で、生涯にわたりどのように運動・スポーツと関わっていくべ

きか考えをまとめること、「アダプテッド・スポーツ」の利点について、授業内容を踏まえた上で、自身の考えをまとめることを求めた。学生が考えをまとめられるよう、授業内容の復習をおこなった。

レポートの提出期限は翌週の日曜日とした、短期間でのレポート作成となるため、第13回の授業開始時にもレポートの概要を説明し、学生が事前にレポートに取り組めるよう配慮した。

全体に対するレポート課題の解説は第15回目の授業にて実施した。学生一人一人に対するフィードバックコメントの返却および評価結果の開示は、9月、後期授業開始前にClassroomを通じておこない、学生からの質問に対応した。

第15回：まとめ

ライフスキルについて説明し、「日常生活スキル尺度 (大学生版)」を用い、学生自身に前期授業開始段階でのライフスキル獲得状況と終了時点での変化について分析させた。第14回に課したレポートの解説を、模範例を元におこなった。自身のレポートとの比較をし、改善点について考えさせた。授業内容のまとめをおこない、最後に学生による授業評価アンケートを実施した。

5. 遠隔授業における留意点

日本大学歯学部学務委員会遠隔授業対策小委員会が作成した「遠隔授業概要」(2020)に示された留意事項に注意し授業を実施した。学生の動きや顔の表情を見ることができない遠隔授業であるからこそ、工夫した点を説明する。

最も重要な点は情報保障である。学生が受講の際に用いているデバイスに左右されないよう、Meet上で共有するスライド資料は大きな文字、分かりやすい図表を心がけた。配布資料

は学生が事前に手に入れられるよう、火曜日の授業に対し、日曜日の昼には Classroom 上に掲載した。資料は PDF ファイルとし、スライド資料ではなく、授業内容を A4 用紙 2 枚程度にまとめたものを準備した。重要な事項が学生に伝わりやすいよう資料を工夫するとともに、聞き取りやすい声の大きさと口調で話すよう努めた。言語での説明とともに視覚的な情報(文字情報や図表)を示し、明確な説明と指示をするようにした。

次に重視した点は、学生と教員とのコミュニケーション、学生同士のコミュニケーションである。特に学生と教員が繋がれる機会を保障したいと考えた。一方向型の授業ではあったが、教員と学生が同じ時間・空間を共有していることが伝わるよう工夫を凝らした。授業の始めと終わりには必ず教員の顔を見せ、画面の向こう側には生きた人間がいることを感じてもらうとともに、生き活きと楽しそうな雰囲気ですることを心掛けた。学生からの質問は、毎回の課題 Forms に質問・意見・要望等が書けるコメント欄を設けるとともに、メールおよび Classroom のストリーム(掲示板)上で受け付けた。学生から質問があるということは、学生が学習に対して困難な状況であることを示しており、速やかな返答を常に心がけた。

学生からの質問とその回答のやり取りをメールではなくストリーム上でおこなうことで、全学生がその内容を把握でき、必要な情報を得ることが可能となる。担当教員は学生に対して Classroom ストリームへの質問投稿を推奨したが、ストリーム上でのやり取りは頻繁にはおこなわれなかった。学生は個人名が出てしまうことにし躊躇したものと考えられた。そこで、授業時の匿名チャットの使用を学生に提案したが、匿名であるが故の問題を危惧する声が学生よりあったため、本授業では使用しなかった。授業運営についての学生からの要望に対して

は、できる範囲で対応し、対応できない事項については、その理由の説明をおこなった。

学生同士が直接コミュニケーションをとることは、今回の授業形態では不可能であった。「生涯スポーツ」の受講学生は入学してきたばかりの新入生であり、どのような仲間がいるのか全く様子がわからない状況であった。そこで、毎回の授業の始めに、前回の学生からの回答やコメントを紹介することとし、学生が仲間の考えや経験等を知る機会を設けた。仲間に対する共感性の向上と、他者と自身を比較することで、学生が自身をより深く知ることを意図した。

6. 遠隔授業の課題と利点

初めての遠隔授業での体育実技を終えて、感じた遠隔授業の課題と利点についてまとめる。

「生涯スポーツ」の授業では、授業内容によって時間内での課題提出を課した。遠隔授業ではあるが、従来の面接授業と同様に教員と学生、学生同士の一体感を得てもらうことも意図しており、それに対して、リアルタイムで一緒に授業を受けていることが感じられて良いという学生の意見があった。その一方で、一部の学生からは、ネットワーク環境への不安もあり、授業内での課題提出に対する不満の声がみられた。そこで、授業回が3分の1ほど終了した時点で、授業内での課題提出をなるべく減らし、授業後の課題を中心とした。学生が課題に時間をかけられるよう提出締め切り時刻も延ばすこととした。これにより、学生のネットワーク不調に対するストレスは軽減されたと思われる。しかしながら、学生にとって授業をリアルタイムで受講する必要性が薄れ、授業時間後に録画・保存された動画を見て、課題を実施したと思われるケースがみられた。ネットワーク環境への配慮と課題の分量、提出期限の設定等のバランスをとることが課題として挙げられる。

面接授業の実技においては、学生が主体的に授業に参加しているかどうかを観察することが可能である。しかし、今回の授業形態では、主体的かつ能動的に授業に参加できていたかどうかを判断することは困難であった。この点について、第11回目の授業で教員が提示した動画の視聴を例に説明する。動画は担当教員がYouTubeに投稿し、限定公開したもので、日にちごとの視聴回数が確認できる。そこで、後日、学生の視聴回数を確認したところ、受講学生136名中、授業時間内の視聴は69回、少し遅れての視聴が4回であった。約半数の学生は動画を視聴していないことがわかる。この動画は、第12回目の視覚障害者スポーツを考案するレポートに直結する内容であった。レポートはA、B、C、Dの4段階で評価をおこなったが、C・D評価となった学生が全体の68%であった。課題の難易度が高すぎたのか、または学生が真摯に授業に取り組めていなかったのか、判断をつけかねる状況となった。

担当教員は、双方向型の授業形態（受講生は30名ほど）をとる他学部でも、同様の内容の授業をおこなった。そこでの学生の動画視聴回数は、受講学生数とほぼ一致していた。動画視聴後に学生に対し、動画の感想を求めることもでき、学生が動画を見ていること、理解できていることを確認できた。少人数の双方向型の授業であるため、学生同士のディスカッションもでき、学生同士が直接的なコミュニケーションを取ることが可能であった。また、運動課題の実施については、学生のカメラをオンにすることで、教員が学生の動きを確認し、指導することもできた。体育実技の特性を考慮すると、遠隔授業という形態の中では双方向型の授業が望ましいと考える。しかしながら、これには、時間割や学生数、担当教員等の様々な問題を解決していく必要がある。

今回の遠隔授業の利点としては、学生からた

くさんの情報が得られた点である。毎回の提出課題の中に授業の感想やコメントを書ける欄を設けた。学生はたくさんのコメントを書いてくれ、その内容は自分の経験や家族のことなど多岐にわたった。面接授業以上に質問も多く、授業運営に対する要望も挙がった。面と向かって教員に質問したり、意見を言ったり、要望を伝えたりすることは、学生にとってはハードルが高いのであろう。また、学生は周囲の目を気にして、発言を控えることがある。Formsを介することで、これらの点が解決され、質問等が気軽におこなえたものとする。面接授業とは違い、学生の動きや様子を見ることはできなかったが、学生を指導していく上で必要となる情報を得ることができたように感じている。

7. おわりに

体育実技を遠隔授業として実施するという初めての経験となった。当然ながら、学生からは、皆でスポーツをしたかったという声はあったが、現環境下でできる最大限のことは実施してきたつもりである。次年度の「生涯スポーツ」がどのような形で開講できるのか、本稿を執筆している現段階では不明である。従来の面接授業となった際には、今回の遠隔授業で得た経験、知識、スキルも活かしたいと考えている。再び遠隔授業となった際には、2020年度の反省点を活かし、より良い授業となるよう努力したい。

本稿では「生涯スポーツ」での取り組みを紹介し、担当教員の感じた課題や利点について報告した。授業の目標達成度や学生の能力向上という観点からの遠隔授業の効果や改善点についての検証は、今後の課題である。

謝辞

2020年度前期遠隔授業の実施にあたって、日

本大学歯学部学務委員会遠隔授業対策小委員会の委員の方々が、Google Calender の設定、Meet の準備、Classroom の作成等の準備、授業実施のサポートをおこなっていただきました。これにより、学生はもとより教員も戸惑うことなく、慣れない遠隔授業を不安なく実施できました。緊急事態宣言下で準備を進めてくださった委員の方々には、感謝の意を表します。2017年より日本大学歯学部の授業の実施に協力くださったボウリング場「シチズンボウル（高田馬場）」は、2020年12月をもって営業を終了します。本学部の教育に対してのご理解に、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

【参考文献】

- Elizabeth F. Barkley・Claire Howell Major・K. Patricia Cross (2014) Collaborative Learning Techniques A Handbook for College Faculty. Jossy-Bass, p.4
- NHK (2020a) マスクつけてジョギング 注意点を専門家が指摘 新型コロナ. NEWS WEB, 2020年5月10日, <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200510/k10012424091000.html>
- NHK (2020b) 中国 マスクつけて体育の授業を受けた中学生の死亡事故相次ぐ. NEWS WEB, 2020年5月11日, <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200511/k10012424411000.html?fbclid=IwAR0SAmRiaOC3G4RZz2nMEMfOV9XPo9TWPsSjfd8mlby2XGEOtemjlbw0U3A>
- NHK (2020c) [テレビ体操] ラジオ体操第1. YouTube, <https://www.youtube.com/watch?v=feSVtC1BSeQ&t=7s>
- NHK (2020d) [テレビ体操] ラジオ体操第2. YouTube, <https://www.youtube.com/watch?v=dzQIMo-Xvyg>
- 朝日新聞 DIGITAL (2020) 新型コロナウイルス感染状況. [https://www.asahi.com/special/corona/\(2020-9-22参照\)](https://www.asahi.com/special/corona/(2020-9-22参照))
- 上野耕平 (2011) 体育・スポーツ活動への参加を通じたライフスキルの獲得に関する研究の現状と今後の課題. スポーツ心理学研究, 38 (2): 109-122
- かんぼ生命 (2020a) ラジオ体操・みんなの体操. <https://www.jp-life.japanpost.jp/radio/index.html> (2020-9-22参照)
- かんぼ生命 (2020b) ラジオ体操 Q & A ラジオ体操の動き. https://www.jp-life.japanpost.jp/radio/faq/abt_csr_rdo_faq_cat02.html#q01 (2020-9-22参照)
- 厚生労働省 (2013) 健康づくりのための身体活動基準2013. <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002xppl-att/2r9852000002xpqt.pdf>
- 国立健康・栄養研究所 (2012) 改訂版『身体活動のメッツ (METs) 表』. <https://www.nibiohn.go.jp/files/2011mets.pdf>
- 島本好平・石井源信 (2006) 大学生における日常生活スキル尺度の開発. 教育心理学研究, 54 (2): 211-221
- 杉山佳生 (2005) スポーツによるライフスキルとソーシャルスキル. 体育の科学, 55(2): 92-96
- 杉山佳生 (2008) スポーツ実践授業におけるコミュニケーションスキル向上の可能性. 大学体育学, 5: 3-11
- スポーツ庁 (2019) 平成30年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」について (報道発表). https://www.mext.go.jp/sports/content/1413747_001_1.pdf
- スポーツ庁 (2020a) 安全に運動・スポーツをするポイントは?. 2020年4月27日, https://www.mext.go.jp/content/20200427-mxt_kouhou02-000004520_2.pdf
- スポーツ庁 (2020b) 安全に運動・スポーツをするポイントは? Ver.2. 2020年5月22日, https://www.mext.go.jp/content/20200522-mxt_kouhou02-000007004_1.pdf
- 日本大学歯学部学務委員会 遠隔授業対策小委員会 (2020) 遠隔授業概要. 2020年4月30日, <https://drive.google.com/file/d/1mKJwN9onf4rjhuTIW-o6brMqwutK22iY/>

view

林容一・笠井淳・鈴木良則・伊藤マモル・吉田
康伸・中澤史・朝比奈茂・荒井弘和 (2012)
大学体育授業でのコミュニケーション行動
を主とした教授方略が主体的な対人行動の
発現に及ぼす影響. 法政大学体育・スポー
ツ研究センター紀要, 30:45-53
文部科学省高等教育局大学振興課 (2020) 遠隔

授業等の実施に係る留意点及び実習等の授
業の弾力的な取り扱い等について (事務連
絡). 2020年5月1日, [https://www.mext.
go.jp/content/20200501-mxt_kouhou02-00
0004520_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200501-mxt_kouhou02-00004520_3.pdf)

山中伸弥 (2020) 山中伸弥による新型コロナウ
イルス情報発信. [https://www.covid19-ya
manaka.com/index.html](https://www.covid19-yamanaka.com/index.html) (2020-9-22参照)

日本大学歯学部紀要投稿要綱

平成 12 年 4 月 1 日
平成 15 年 10 月 1 日改正
令和元年 7 月 1 日改正

- 1 本誌の目的
本誌は日本大学歯学部における研究活動の発表報告を目的とし、年 1 回発行する。
- 2 投稿者の範囲
原則として日本大学歯学部所属の一般教育を担当する教員とする。ただし、共同研究の場合はその限りでない。
- 3 投稿原稿の種類
研究論文（総説，原著，短報），研究の紹介・解説などとする。
- 4 投稿原稿の採否等
投稿原稿の採否，掲載順序は編集委員会で決定する。
- 5 著作権
本誌に掲載された論文などの著作権は日本大学歯学部へ帰属する。
- 6 投稿原稿の形式と提出先
A 4 判の原稿に横書きとし，原則として MS-WORD 形式で作成したデータを所定の投稿用表紙とともに研究事務課宛に送信する。図表はモノクロのみとする。
提出先：日本大学歯学部研究事務課
E-mail：de.institute@nihon-u.ac.jp
〒101-8310 東京都千代田区神田駿河台 1-8-13
電話03-3219-8060 Fax03-3219-8324
- 7 校正
校正は著者が行う。印刷上の誤り以外の加筆訂正は認めない。
- 8 その他
本要綱によらない事項および要綱の改正は編集委員会で決定する。
本要綱の改正は編集委員会で行う。

日本大学歯学部紀要編集委員会

委員長 尾崎哲則

副委員長 田嶋倫雄

委員 宮崎洋一 中野善夫 藤田智史 佐藤紀子

上原 任 三澤麻衣子 白井宏尚

幹事 森 英美 吉田 竜

日本大学歯学部紀要

非売品

第48号 (2020)

令和2年12月20日 印刷

令和2年12月25日 発行

編集 日本大学歯学部紀要編集委員会
発行 日本大学歯学部
〒101-8310 東京都千代田区神田駿河台1-8-13
電話 03 (3219) 8060 (研究事務課)
E-mail: de.institute@nihon-u.ac.jp
印刷所 ヨシダ印刷株式会社
〒130-0014 東京都墨田区亀沢3-20-14

© 2020 Nihon University School of Dentistry